

巻頭言

鳥井正晴

昨今、人文科学が「死に体」の様である。

昔から、テツ（哲学）、シ（歴史）、ブン（文学）と呼ばれ慣わされて、「人間」を貫通するところの「教養」の学で人文科学は、本来あつたはずである。その「教養」学に、元気がない。その人文科学に、気がない。

アクロポリス（ギリシャ）のパルテノン神殿は、1687年の破壊（ベネチア軍の砲撃による）まで、2000年以上も、ほぼ完全な姿を保ち続けていたと云う。人間の営為は、計り知れなく大きかつたはずである。

たとえばテツで云えば、親鸞の『教行信証』は完成に40有余年かかつたと云われている。中村元の『佛教語大辞典』には、28年の時間が費やされている。

ブンで云えば、西郷信綱の『古事記注釈』は15年、伊藤博の『萬葉集釋注』は18年、片桐洋一の『古今和歌集全評釈』は、完結まで20年の歳月を要している。小沼文彦の『ドストエフスキー全集』の個人全訳は30年、井上究一郎の『失われた時を求めて』の個人全訳は、20年を要している。

部屋に籠もり執筆する夫・辻仁成（『海峡の光』で芥川賞）を妻は、『夕鶴』のつうが羽根を抜いて織物を織るよう」（朝日新聞）と評した。

トルストイは、『戦争と平和』に9年の歳月を要した。「生涯に九十余冊の日記帳を書き残したというが、この九年間はその楽しみさえも返上して、（中略）文豪は書齋から出てくるたびに悲痛な声で「今日も貴重な生命の一滴をインキ壺の中へ落して来たよ」と、妻のソフィアに語るのを常とした」（井上ひさし）と云う。

その『佛教語大辞典』は、20年かけて書き上げた原稿を出版社が紛失してしまう。中村は再度8年をかけて、黙々と再執筆した。人間の営為に驚嘆させられるであろう。突き抜けた人間の大きな営為として、その結果としての「人文学」の諸般事がある。

* *
かつて漱石は、東京帝国大学に入学するため熊本（第五高等学校）から上京する三四郎に、広田先生をして車中で、次のように云わしめた。

三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢ふとは思ひも寄らなかつた。どうも日本人ぢやない様な気がする。「然し是からは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」と云つた。熊本でこんな事を口に出せば、すぐ擲ぐられる。わるくすると国賊取扱にされる。三四郎は頭の中の何処の隅にも斯う云ふ思想を入れる余裕はない様な空気の裡で生長した。

（中略）

すると男が、かう云つた。

「熊本より東京は広い。東京より日本は広い。日本より……」で一寸切つたが、三四郎の顔を見ると耳を傾けてゐる。

「日本より頭の中の方が広いでせう」と云つた。

「囚はれちや駄目だ。いくら日本の為めを思つたつて最負の引き倒しになる許りだ」

此言葉聞いた時、三四郎は真実に熊本を出た様な心持ちがした。同時に熊本に居た時の自分は非常に卑怯であつたと悟つた。
（明治41年『三四郎』第一章）

* * *

人文学が、「死に体」でいいわけがない。人文科学よ、元気を奮い起こせである。そもそもどこまでも「広い頭の中」の、根幹の「人間学」で人文学はあるはずなのだから。人間の無い処に学問はない。人間の在る処にこそ、学問の出発と帰結があるだろう。